

## 真実の連帯を求めて

社会福祉法人青丘社 桜本保育園

### 一、 新しい胎動

川崎の南部、無数の煙突が林立し、さまざまな労働者がその生を営む臨海地帯の一角に、ひとつの新しい社会福祉法人が産声をあげた。一九七三年十月四日のことである。

その名を青丘社という。青丘 それは韓国の別名でもある。韓国語ではチヨングと読む。

長い道のりだった。法人認可を取得するまでの毎日、それは文字通り苦闘の連続であった。いつの時代であれ公共事業は、人間の内に宿る善意にその出発点をもつゆえ、そのことを銘心していただきたいとは、県民生部長の訓示であった。県庁で認可書を手わたされた時に、いただいたことばである。

善意は決して強要するものではない。自発的だからこそ善意となる。しかし、それだけに善意を集め何らかの事業をなすのは、並大抵のことではあるまい。私たちにおいてもそうであった。野心なき人の善意を、ひとつの大きな力へと結集させるのにどれほど苦労したであろうか。だが、そのような苦しみと同時に、いや、それにまさって私たちに重くのしかかってきたひとつの現実があった。

それはこの法人が、在日外国人、すなわちこの国に一定の在留資格をえて居住する私たち韓国人によって設立され、運営されていくという事実に起因していた。日本社会で韓国人が、社会福祉法人の理事会を構成して公益事業を行っていく。これはまれに見るケースであろう。いや、類例がほとんどないといふべきかも知れない。それだけに私たちは、韓国人であるがゆえに、さまざまな壁に直面させられたのである。障害にぶつかった。多くの制約を余儀なく

させられた。日本社会の壁のあつさを、ほんとうにしみじみと味わされもした。戦いの連続だった。

けれども、私たちはそうしたプロセスの中で、多くの日本人兄弟姉妹たちがさしのべてくれたあたたかい協力と熱い友情を決して忘れてはいない。彼らは私たちにとりひとすじの希望の光であった。おそろく、彼らの支えと励ましくなくしては今日の私たちはなかったであろう。その思いは、海外の諸キリスト教会、とりわけカナダ長老教会に対しても同じである。人間の内に宿るまことの善意に触れたのも、彼らを通してであった。

今、青丘社は未来に向かって羽ばたこうとしている。チヨングー何とすばらしい名前だろう！ 私たちはその名にふさわしい歩みをしていきたい。今までがそうであったように、これからも私たちの前にはあつい壁がたちはだかるであろう。だが、私たちはくじけまい。多くの人々、その内にある善意を知った以上私たちには絶望はありえないのだ。

私たちには夢がある。限らない夢がある。労働者の町、この海に臨んだ庶民の町で、私たちは生きていく。図書室を作り近くの子供たちに提供しよう。法律相談や医療相談も始めよう。青年講座や婦人学級を開設して共に語り行動しよう。労働講座も開きたい。働く婦人たちのために保育園も充実させよう。

だが、私たちは何にもまして、日本に居住する韓国人として、誇りをもってこの業にたずさわりたく思う。民族の歴史や文化、祖国のことばを失ってしまった私たちの子弟が、真に民族の一員として、たくましく生きる人間として、この地に生活できるように共に歩みたく願うのだ。この異国にあって、韓国人が韓国人独立主体的に生きる時、それが同時に日本人を真に日本人として立たしめることになるのだと思う。ナショナルなものをきちんとさせることによって、真のインターナショナルな関係が生まれてくるのではないだろうか。

長い社会福祉事業の伝統に自らを接続させつつ、今置かれた場とその関係性のまっただ中に、堅く立って歩んでいこう。これが私たちの姿勢であり、決断だ。新しい胎動が始まった。それを温かくみまもり育てていこう。

## 二、信仰共同体―川崎教会

社会福祉事業は、基本的に人の善意に基礎をおく共同体の業である。善意共同体と呼べよう。ここで、それとのまったく同等の比重を置いて「信仰」共同体について言及せざるをえない。善意を生みだした信仰者の群れについてである。それは「在日大韓基督教川崎教会」である。

現在日本には六三万近くの韓国人が在住しているが、太平洋戦争終結時にはその数が、二四〇万をこえていた。六十数万人の人は、その親族であり、子孫である。日本の敗戦は韓国にとり独立解放の時であるが、大半の韓国人は祖国に帰り、現在右の上げた数の人々が今日まで日本に在住してきている。民族大移動ともいえるほどの多数の人々が、なぜ日本に居住しているのか？それは、戦前日本の海外政策、ことに対アジア政策と深い関連をもつことがらであるが、要するに日本の「三六十年間にわたる朝鮮植民地」支配の落とし子なのである。特に太平洋戦争末期日本国内の企業や鉄道敷設・炭鉱・ダム建設などの労働力補給源（徴用）として、あるいは、戦闘員補充（徴兵）として、強制的に連行されて渡日した人々がまさにそれである。そして戦後その多くの人々がそのまま日本に居住している。川崎に住む九千名近くの韓国人は、ほとんどそうした過去の歴史を背負って生きている。その大半が臨港地帯、つまり鉄鋼・造船を初めとする大企業が雑居している地域に生活しているのは、彼らのこのような生活史を如実に物語るものだ。

川崎教会に所属するキリスト教徒は、そのほとんどが韓国人であるが、右にのべたような歴史を行きぬいて今日にいたった。あるいはその子孫である。教会が位置する地域には、例えば千名近くの児童が在学する市立小学校に、約百名の韓国人生徒が通学しているという統計にみられるように、韓国人が数多く生活し、その数四千人といわれている。韓国系、北朝鮮系の民族団体や教育機関もあって、各々独自の民族運動を展開している。

もつ少し、地域の状況に言及すれば、川崎教会の周辺は、公害認定患者

が多く住んでおり、その発生率は川崎市内最高である。環境汚染がきわめてひどい地域である。鼻をつく亜硫酸ガスがこの地域全体に充満することはめずらしいことではない。無数の企業が無限に近い化学製品を産みだしているため、毒素を多分に含んだガス類が貯蔵され、地震や火災が万一発生すれば、川崎駅以南はまず助かるまいといわれる。消防署の話である。企業の横暴さに毎日腹を立てつつ生きているのが、民衆のいつわらざる気持ちであろう。公害などではなく「私企業害」といってべきだと語るのである。

韓国人をめぐる地域的狀態を、いわば戦前の、つまり「過去」の歴史がうみだしたそれと考え、私企業害（公害）を中心とした地域的狀態を、戦後の、つまり「現在」のそれと考えれば、川崎教会は、今日までの二十五年にわたる歩みを、いつも「過去」と「現在」にはさまれつつ、呻吟してきたといえよう。

この川崎教会が、五、六年前から、日曜日から水曜日の夜以外は使用しない会堂を開放して、月曜日から土曜日まで保育所を開設した。その動機は単純である。要するに、近隣に密集して生活する労働者の、特に共稼ぎ夫婦の便宜をはかってあげたい、と考え、三人の保母を中心に約三〇名の子供たちをあずかったわけである。しかし、保育所実現は決して簡単になされたのではない。物理的には会堂提供というだけで困難はなかったが、教会員の心理的あるいは信仰的態度においては、「聖所」(かつて宗教民族イスラエルは、礼拝堂をそう呼んだ)を世俗的業のために供することは、少なからぬ抵抗があった。厳しい議論がなされた。あきらめかけたこともあった。

だが、結局教会員は、次のような信仰的理解に立って、会堂を喜んで保育所に提供することに賛成したのである。すなわち、自分たちにとって信仰に生きることは、自ら充足した世界に安住するのではなく、そこをこえ、隣人と深く関わっていくことである。進んでは、隣人、つまりこの地域に共に生きる人々の重荷と課題を、苦楽を分かちあって担っていくことではないか、と。しかもその場合、隣人とは中性的存在なのではなく自分の帰属する場をはっきりさせ、換言すれば、日本人は日本人らしく、韓国人は韓国人らしく生きていく

意味における隣人なのである。

こうして保育所は開設された。保育カリキュラムにおいても、従来の六領域のほかに、新しく「となり人」がつけ加えられた。そして、園児は、日本の子供も韓国の子供も互いに相手の人格を尊重しあっていたいられるように、共に保育を受けることとなった。私たちは、こうした保育の場における教育実践が、その背後に川崎教会という信仰に基づく共同体を支援団体としていた中で、少しずつなされてきたという事実を、感謝をもって思いおこすのである。

### 三、無認可から公認保育へ

三人の保母と三十数名の子供たち、そして木造平屋の狭苦しい保育室――無認可保育所（やがて名前を桜本保育園とした）時代の一般的イメージはこのようである。それは五年間にわたって続けられ、三五〇世帯以上の家庭と接触を持ち、毎日の保育だけでなく、月一度開く「父母会」（年に三回以上欠席すると退園させるという厳しい条件をつけて）を通して、園の教育方針・内容と共に話しあってきた。保育は、単に共稼ぎ夫婦の便宜をはかるため、という当初の考えは、否応なくのりこえられ、家庭と園とが互いに信頼しあう中になされるべき大切な幼児期の教育実践であると理解され始めてきた。他の人々のためにへしてあげるのではなく「へらが真の人間になるための不可欠」の業としてうけとめられ始めた。韓国人園児にはきちんと本名を使用させ、その呼び方も漢字を日本式に読むのではなく、韓国固有の呼び方に変えさせた。名は体をあらわすからである。子供が本名を使い、それを誰に対しても堂々と名を呼ぶことを通して、いつの間にか、日本名を使用することを当然と考えていた（それを同化現象という）親自身が逆に変えられ、自分の民族的・人間的主体を回復するといふべきこともあった。自分の子供が、最も近い国のことばを外国語として、最初に勉強させてもらってうれしい、と熱っぽく語ってくれる日本人の母親もいた。確かに遠いヨーロッパやアメリカの言語に先立って、

韓国語や中国語を身につけるのは、日本人にとって大切なことであろう。

昨年の八月、私たち保育園関係者は、教会の青年たちを交えて、二泊三日の研究会を開いた。子供を連れて参加した保母もいた。昨年（七三年）といえば、保育所を開設して一年目になる年であり、保母の数も常時五名は確保され、園児数も七〇名に達し、韓国人保母を中心にして、さらには日本人職員をも入れた大所帯になりつつあった時期でもある。そして、国にとっての最大の問題は、それまでの無認可形式の保育園を、公認されたそれへと移行させるに際して（移行措置は、法的に昨秋決定された）、教育方針・内容、制度的財政的保障などに関する園側の、厳密に言えば保母たち自身の教育の姿勢をどのように確立するか、ということであった。それに先立って、法人設立委員会や教会関係者の間で、公認保育の是非論（例えば、財政的保障がなされる利点と行政レベルでの規制、教育内容への介入などのマイナスイ面を、どうとらえるべきか？）が戦わされたが、研修会でもそれは終始白熱した議論の対象となった。いろんな角度から検討した後、私たちは「研修会報告書」を作成した。このレポートは、ある意味で、桜本保育園の五年間を総括したものだといえよう。「さて、桜本の地区に保育園を開園して、五年目に入りました。この間、実にさまざまなことがありましたが、在日大韓基督教教川崎教会の桜本保育園として、キリスト教精神にもとづき、それぞれの子供に接してきました。本当の意味で子供たちの人格を尊重しあい、ありのままの存在を認めるとは、どのようなことなのか、地域社会に奉仕するという意味での保育のあり方は、どのようなことなのかを、試行錯誤をくりかえしながらも、どうにか続けてくることができました。」

ここには、保母たちの偽らざる心情があらに表現されている。試行錯誤のくりかえし 五年間を一言でいえば、まさに、このことばに集約されるであろう。続いて、この歩みの全てが、園父兄、地域住民、教会関係者の変わらざる支援によって、今日に至ったことを感謝しつつ、今後はその目を地域社会に向け、こう語るのである。

「私たちの住んでいる地域には、公害に代表されるようないろんな困難なことが存在しております。私たちの保育園の中にもそれはあります。」

子供たちが背負わされているさまざまな問題、それは小児センソクの子がいたり、障害のある子がいたり、また家庭環境にめまれない子、そして韓国人を父母にもつ子の生き方育て方の悩み、など実に多くあります。」

桜本保育園は、軽度の身体障害児を意図的に入園させ、それらの子供たちが障害をもたぬ子供たちと一緒に生活することにより、埋もれた可能性を少しでも発掘でき、同時に無障害児が人間としてのやさしさ、いたわりなどの情緒を豊かに身につけられるよう教育的配慮をしている。注目に値する教育実践だと思ふ。

最後に報告書は次のようにしめくへっている。

「考えてみますと、純真な子供たちの保育を通して形成される人間形成において、私たち保育の心がまえはもとより、父兄の皆さま共ともに深い愛情をもって、真に子供の将来を案じ、接していくことの大切さ、責任の重さをかんじないではいられません。」

教育権は、教育を受ける側にある。自明の理である。だが、絶えずその権利は横暴な為政者、国家権力によって剥奪されてきた。それが私たちの現実である。だから、そのゆがんだ現実を変えなければならない。保母たちは今はつきりとそれに見定めつつある。その目ざめこそ、地域社会に深く入りこむと共に、その問題の根源を鋭く、また的確に指摘し、解決へと向かわせていく力になる。青丘社の業に参与する私たちは、今そのことを深く考えさせられている。

「人が全世界を得ても、自分の命を失ったら何の益があるのか？人はどのようなにしてそれを買ういもどすいびができようや？」（新約聖書から）

一人間の生命は地球よりも重いのだ。しかし、それゆえにこそ、その生命を失われぬ、ないがしろにするあつい壁や障害と戦わねばならないのである。勝利せねばならない。川崎の、依然として不気味な黒煙がまい上がっている南部の一隅にあって、私たちは、立ち上がろうとしている。多くの人々の善意と、

愛によって働く信仰とを、車の両輪として、双手の武器として、歩み出そうとしている。真実の連帯を求めて……。 （一九七四・

三・一）

（注）文責はすべて桜本保育園園長の李仁夏と社会福祉法人青丘社理事の小杉剋次にあります。

※四〇年以上前、青丘社の立ち上げに当たった文章です。今の時点では、「軽度の身体障害児を意図的に」など、違和感のある表現もありますが、当時の想いを感じ取って、継承すべきエッセンスを読み取ってください。